

## 看護学生に対する環境教育の実態

### —医療廃棄物を中心に—

和歌山県立医科大学看護短期大学部 松下 由美子

#### 1 はじめに

これまで医療廃棄物は、医療従事者にとって針刺し事故やHB型肝炎などの原因となる感染性廃棄物としての捉え方が主であった。しかし、排出される医療廃棄物はディスプレイ製品の増加に伴い、膨大な量となり、また廃棄物組成も複雑で安全処理を行うのも困難になってきている。さらに、ダイオキシン問題による病院の焼却施設閉鎖や不法投棄問題もはらみ、医療廃棄物は病院施設内だけの問題ではなく、病院外で引き起こされる問題も無視できなくなってきた。そこで医療従事者、特に看護師に対して医療活動からもたらされた廃棄物問題への関心を高める必要があると考え、看護教育において医療廃棄物に対する教育はどのような現状であるのか調査した。今回の結果から、「医療廃棄物を自らの活動がもたらした環境問題への意識として広げていく看護活動」の必要性を提言したい。

#### 2 方法

全国の看護大学、及び看護短期大学から平成12～14年度版のシラバスを収集し、各大学における授業内容を調べた。なお、収集できたシラバスは78校分である。また、収集したシラバスの内容から、「看護学生への医療廃棄物問題に対する授業の必要性や必要と考える理由」「具体的な授業展開の内容、方法」を質問項目とし、アンケート調査を実施した。

#### 3 結果及び考察

シラバスからは、ほぼ全看護大学、短期大学で環境問題について講座が開かれていることが明らかとなった。また、授業は主に1年次生を対象に一般教養科目として開講されており、ほとんどの大学では「必須」としているが、「選択」とするところもあった。授業時間数は、主に1回/週で15回である。授業の展開方法は、時間数が少ないた

めか、多くの環境問題を通り一遍に講義形式で説明する方法で行われているため、実体験を伴うような工夫はみられない。授業内容は、わが国の環境問題として公害問題（水俣病他）、大気汚染、水質汚染を挙げているところが最も多く、次に、地球環境問題として地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、森林破壊について授業が展開されている。

看護系大学における授業の特徴としては、内分泌攪乱物質（ダイオキシン）について、詳しく説明する時間を設けている大学が多い。また、食物連鎖から食生活を考え、アトピー問題へと展開させるなど、私たちの直接的な健康被害へと環境問題を関連させていく講義も見られる。しかし、環境倫理を考えたり、自分達の生活行動を見直したりすることができるような授業の工夫はない。今回調査の視点である、医療廃棄物問題を環境問題から授業展開しているのはたったの1校のみであった。

以上のシラバス調査から、医療廃棄物問題に対して環境問題への視点から授業展開されている看護系の学校は皆無であると予測できた。しかし一方で、多くの看護系の学校では、医療廃棄物は、基礎看護学講座の「感染対策」の一環として説明されていることが明らかとなった。その主な授業内容は、シラバスからの調査では限界があったが、医療廃棄物取り扱いに対する説明と注意に終始していると予想された。

次に、アンケート結果による「医療廃棄物問題に対する授業の必要性や必要と考える理由」では、「医療職（直接的な排出者）として、医療廃棄物についてこれだけの問題が噴出してくれば、解決に向かう方策を考えていくために、当然の義務である」とする意見や、さらには「医療問題に対する意識づけ、動機づけは、学生時代から養うことが最も効果的と考えているため」という意見があった。ところが一方で、「病院が直面している目下の医療廃棄物の問題点は、感染性に関する点であり、医療廃棄物による環境問題にまで、授業をする必要性があるのか」「(あるとしても)それは一般教養の領域になるのではないか」という疑問や否定もあった。また、(医療廃棄物による環境教

育の) 必要性を感じていても、「現在、各看護系大学では、専門職として学ばなければならないことが多く、実質的には、環境問題まで講義できるカリキュラム構成が難しい」。さらに、環境問題については、「医療関係以外の非常勤講師が、講義を行っているので、医療廃棄物問題を講義に取り入れるか、どうかはその担当教員に委ねられている」また、「(看護教員側が講義を実施するにしても) 説明する看護教員自身が医療廃棄物によって発生している環境問題に対して知識不足」など具体的な実施の困難性、現状の限界を訴える意見もみられた。

「具体的な授業展開の内容、方法」としては、「新聞やニュースからトピックを取り上げて、グループワークをする」「(現時点では方法として難しいが、理想としては) 実際に不法投棄の現場を見学する」「病院の臨床現場で、廃棄物の分別や収集作業がどのように行われているのか実際に見学、体験する」「清掃業者や処分業者の方々の声を聴講する」など主に、体験学習的な展開があげられた。

#### 4 まとめ・今後の課題

今回の調査で、看護学生に対する環境教育は、公害問題、大気汚染、水質汚染、地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、森林破壊などを中心として行われていることが多く、医療廃棄物問題を環境の視点から取り入れているところは、皆無であることが明らかとなった。その原因としては、教育の必要性を感じながらも、実質的なカリキュラム枠の中では、時間的な配分が難しいこと、講義を担当する(看護)教員自身が、医療廃棄物に関する環境問題に知識をもっていないことが原因となっていると理解できた。

今後の課題としては、限られたカリキュラム時間数の中で、医療廃棄物問題を展開する授業構成を考えていく必要性があろう。また、アンケート結果からもあるように、体験学習的な機会を設けることにより、学生だけでなく教員自身も一緒に学ぶことで知識を高めることが可能となる。具体的には、大学内でのグループワークや臨床実習現場での活動時間を活かし、廃棄物に関して体験的に学び、動機づけできる場を創り、発展させていきたい。